

まるち
あぐる

Vol.52

中央大学の教員の研究に迫る
インタビューシリーズ

学びのシステムを問い、 対話で社会を編み直す

—— 公民館研究を原点に、共創的な学習の場を探って ——

社会教育学への関心から
研究者の道へ

—— 教育に関心を抱くようになったきっかけを教えてください ——

両親が教員という家庭環境もあり、幼い頃から教育は身近な存在でした。大学進学時は将来の進路に迷っており、特定の専門分野に限定せず幅広い学びを得られる東京大学に進学しました。教養課程で受講した比較教育学の授業で、教育学には、学校での教授法だけでなく、制度や政策から教育の在り方を問い直す視点があることを知り、興味を持ちました。さらに、大学3年次に教育学部に進学した後、社会教育・生涯学習の研究分野に

初めて出会いました。当初、社会教育への関心は高くなかったのですが、「生涯学習」という概念の下、学校を包摂した「社会」の視点から教育を捉えられるところに魅力を感じました。学校で起こっているさまざまな問題の多くは、学校単独で解決するのが難しいと感じていたことも、影響したと思います。

—— 大学院に進んで研究を続けた理由を教えてください ——

学部時代の学修だけでは教育制度や教育行政について十分に理解できていないという自覚があり、大学院に進学しました。修士課程では、行政と民間の関係、特にNPOが教育に及ぼす影響を考察し、博士課程では公民館を主な対象としてつ

社会教育のガバナンスを研究しました。修士課程まで進路を決められず悩んでいましたが、共に学ぶ院生の「仲間」からの刺激と支援に恵まれたことが、研究を続けられた大きな理由だと思います。

「公民館」を入口に、社会的に
学習を支えるシステムを研究

—— 現在の研究テーマについて教えてください ——

私の研究では、学習を個人的な「知識獲得」ではなく、社会的な「参加」の過程と捉えています。どんなに懸命に教科書で英語を学ぶよりも、日常的に英語を話す環境がある方が英会話の上達が早いように、学習はコミュニティに埋め込ま

れて生じています。既存のコミュニティの境界を越えるような学習機会をどう創出し、そのための社会的ネットワークをどう構築するか——。そのプロセスにおける対話的コミュニケーションの役割と方法論を探究しています。

大学院生の時から続いている「公民館」研究ですが、これは、施設そのものの分析に留まりません。社会教育は、その性質上、学校教育と比べて制度的な縛りが緩く、各地方自治体の歴史や政策によって非常に多様です。「公民館」は、教育行政の「境界」を考察するための格好の対象でした。その研究の先に見えてきたのが、学びは教育行政の中だけに閉じて生じるものではないということです。

文学部准教授

さとう ともこ
佐藤 智子

東京大学教育学部卒業、東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。博士(教育学)。東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授等を経て、2025年より現職。専門は教育学(教育行政学、社会教育・生涯学習研究)。主著として『学習するコミュニティのガバナンス: 社会教育が創る社会関係資本とシティズンシップ』(明石書店、2014年)など。

この研究を通して「ハードウェアとしての施設があるだけでは、市民の学習の実質は保証されない」という気づきを得ました。施設の名称や制度的な位置付け以上に、人的・ソフトウェア的な側面が学びの成果を大きく左右します。つまり「公民館」というハコそのものよりも、教育と社会をつなぎ、産官学の連携・協働を前提とした、学習を社会的に支える「システム」や「プラットフォーム」の在り方が重要なのです。

対話と共創による学びのプラットフォーム構築をめざす

現在の研究の課題をお聞かせください

現在、他大学の先生方とチームを編成し、インクルーシブな生涯学習プラットフォームの構築をめざして、内閣府「戦略的イノベーション創造プログラム（SIP）」のプロジェクトの一部に、参加しています。

私にとっての最大の挑戦は、異分野の

中大の研究をもっと知りたい方に！



Plus Chuo Univ.

**中央大学の研究と社会を結び、
産学官連携を推進する
情報発信オンラインプラットフォーム**

旬な本学研究者のビジョンや研究内容、実際に取り組む産学官連携プロジェクト、研究アクティビティや成果の最新 News を発信しています。ぜひ、ご覧ください。



専門家とのコミュニケーションと合意形成です。異なる学問的背景を持つメンバーでは、言葉の使い方や物事の捉え方に相違があり、共通理解の形成には多大な時間とエネルギーを要します。ですが、この困難こそが「社会的な分断」の要因でもあり、これを乗り越えようとするプロセス自体も重要な研究対象だと捉えています。そして、このコミュニケーションの難しさを克服するのに必要なのが「教養」だと痛感しています。ここで言う「教養」とは、相手の持つ価値観や文化的背景を理解・尊重した上で、建設的な対話を可能にする共通基盤であり、専門分化が進んだ現代社会において不可欠な要素です。

一方で、実践の持続可能性を担保する資金調達も大きな課題です。特に教育分野の活動の多くは、公的資金に依存しがちです。しかし活動を社会に実装し、自律的に継続させていくためには、行政に過度に依存せず、持続可能な運営体制および事業モデルの構築にも取り組む必要があると感じています。

研究を通じて、どのような社会の変化を実現したいとお考えですか？

対話的・共創的な学習が、社会のあらゆる場面で当たり前のものとして実践される文化を醸成することが私の願いです。日々幸せに生きていく上で、人間関係の質はとても重要です。あらゆる人間関係のトラブルは、コミュニケーションを通じた相互理解と社会的寛容性の不足・欠如に起因しているように感じています。

分断と排外主義的傾向が大きくなっていく時代だからこそ、私たちは改めて対話について深く学び、実践し、変革し、社会を創り直していかなければなりません。いわゆる「受験勉強」でイメージされるような知識注入型で個人主義的な「勉強」中心の考え方から脱却し、対話を通じて市民一人ひとりの主体性と個性を引き出すことのできる、社会的な教育システムを構築することが重要です。そのために、社会教育学が貢献できる余地は大きいと考えています。

個性を引き出し、挑戦を応援する学びの場を提供するために

学生を指導する上で、心掛けていることがあれば教えてください

学生一人ひとりが持つ個性や能力を最大限に発揮できるよう、それぞれの個性と興味関心を大切に、「教え込む」よりも「アイデアを引き出す」ことを意識しています。

ただ、自分自身の考え・意見・アイデアを持つというのは、簡単なことではありません。それをもととするためにも、学生には良質な経験の機会が必要です。年長者・年少者を問わず多様な人々とコミュニケーションを図って、できればグローバルな世界を体験しながら、感性を磨いてほしいと願っています。

最後に、学生と保護者の皆さんへのメッセージをお願いします

学生の皆さんには、自分自身が情熱を傾けられる対象や課題を持つてほしいと

思います。ただ、まだ今はそれが見えていなくても問題ありません。大学という場で、いろいろな機会を活かして挑戦し続けることで、その対象がおのずと見えてくるはずです。

そして、学生を支える保護者の皆さまには、それを最大限に支援・応援いただけたら幸いです。大学には多様なチャンスがありますが、それを活かすも殺すも学生次第。挑戦の先にある「失敗・挫折」は、学びと成長の大きな契機となります。ただ、その「失敗・挫折」が、実際に学びになるか単なるトラウマに終わるかは、その過程や結果を、本人がどう意味づけているか次第です。周囲からの支援や応援があればこそ、学生の皆さんもさまざまなことに挑戦できるはずです。

【論文紹介】

『社会関係資本——現代社会の人脈・信頼・コミュニティ』

(ジョン・フィールド著、明石書店)

「社会関係資本」という概念を起源から紐解き、人脈や信頼が持つ正と負の影響、デジタル時代の新たな動向も踏まえ全体像を描き出す入門書。翻訳を担当。



『学習するコミュニティのガバナンス：社会教育が創る社会関係資本とシティズンシップ』(明石書店)

社会的格差・排除を乗り越え、複雑な社会問題の解決に取り組むアクティブな学習者になるためのガバナンスを理論的・実証的に描き、公教育としての社会教育の効果と課題を示す。

